黒い服を着たサンタクロース

器用貧乏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
黒い服を着たサンタクロース

【Ｎコード】
Ｎ３０５１Ｐ

【作者名】
器用貧乏

【あらすじ】
芝井探偵第６弾。サンタクロースの存在を疑う子供たちを驚かそうと大人たちが奮闘する。

プロローグ

「いるわけないじゃん、サンタクロースなんて。」
直美は呆れたような口ぶりで答えた。
昼食後の休み時間、二人は熱い議論（という程のものではないが）を展開していた。
「え～、でもママは『いる』って言ってたよ。去年はちゃんとプレゼントもくれたし。」
優子が頬を膨らませて反論する。
「ねえ、若菜。あなたもサンタさんはいるって思うよね？」
直美相手に一人では不利だと思ったのか、優子は近くの席に座っている若菜を味方に引き込もうとした。読んでいる本に目を落としていた若菜は、ずれ落ちかけていた眼鏡を指で直し、首だけを優子の方に向けた。
「うん、いると思う。たしか、グリーンランドっていう国にサンタさんの家があるって本で読んだことあるよ。」
若菜の返事に気を良くした優子は、
「ほら～、物知り博士の若菜が言うんだよ。間違いないよね。」
胸を張り勝ち誇った表情を見せた。直美は肩をすくめてこの議論を終わらせる合図をするかのように、次の授業の準備をしようとランドセルを机の上に置いた。優子も結果に満足したのか、「お手洗いに行ってくる。」と言って教室を出て行った。
おかしいな…、ノートや筆箱などを取り出しながら直美は首を傾げた。若菜は小柄で引っ込み思案で多くを語らない女の子だが本好きで物知りなのは知っていた。だからこそ、様々な知識を得ている若菜だからこそサンタクロースの存在を否定するものだと思っていた。だが若菜の返答はそうではなかった、ということは…。
う～ん、と小さく唸りながら首を傾け考えていたら、本を読み終えパタンと音を立てて閉じた若菜と目が合った。直美は、つまらな

い議論に若菜を巻き込んでしまった、という思いから済まなそうな笑顔を向けていたが、若菜は穏で優しい目をして直美に微笑みかけていた。

そう、それはまるで‥、聖母(マリア)のように。

事務所にて

「サンタクロース？」
新聞を読んでいた芝井は、急に飛び込んできた話題にびっくりし、パッと目を上げて直美の方を見た。
「そう、サンタクロース。本当にいるのかなあ…。」
直美は腕を組み考えるような仕草をしている。
「いるわよねえ。疑り深いんだから、直美は。」
里美が微笑みながら、芝井の代わりに返事をした。
今日は日曜日。直美が俺の事務所に行きたいと言い出したので、俺の姉の里美がその子である直美（俺から見れば姪）を連れてやって来た、ということらしい。入ってくるや否や前述のような質問をされたので面食らってしまった。
「う～ん、どうかな。いるんじゃねえか。」
あまり関心がない話題なので、素っ気なく答える。そう答えた瞬間、鋭い視線を感じたので目を向けてみると、里美が何かを含んだ目で俺を見ているので瞬時にその意を読み取った。
ははあ、なるほど。母親としては娘に、夢を持っていて欲しい、と考えているんだな。よし、たった一人の姉と、可愛い姪の為だ、一肌脱いでやるか。
「ああ…、そういえばヨーロッパの北の方にサンタクロースが住んでいるって聞いたことがある。」
さも思い出したかのように話し始めると、
「グリーンランドでしょ、若菜が言ってた。」
直美が即座に言い返してきた。
「へえ、物知りな子がいるんだな。だったらこれで決まりだ。いるんだよ、サンタクロースは。」
「でも、おかしくない？そんな遠くの国からわざわざ家にまでプレゼントを届けてくれるなんて。」

直美は腑に落ちない様子で考え込んでいる。
「別にヨーロッパからわざわざ来る必要はないんじゃないか？お前は勘違いしているのかもしれないが、サンタクロースって一人じゃないぞ。一人でどうやって世界中の子供たちにプレゼントを届けることができるんだ？しかもたった一日で。これは俺の推測だが、サンタクロースは世界中にネットワークを持っているんだ。支社というか担当というか、この地域はあなた、あの地域は君、というような仕組みで成り立って動いていないと言語や文化も違う子供たちに、等しくプレゼントを行き渡らせることなんて不可能だからな。」
半分思いつきで話していたが、あまりに真剣に語っている俺の様子に気圧されたのか、直美の気持ちが揺れ動いているのが見て取れた。あともう一息だ。
「よし、今年は俺の事務所でクリスマスパーティーをしよう。直は友達を何人か連れて来てくれ。俺は：新田でも呼ぶか、忙しくて来れないかもしれないけど。姉さんも出席してくれよ。」
と言って、姉に目配せをした。姉も俺の発言と意味深な表情で察してくれたのか「いいわね、色々と準備しておかなくちゃ。」と、これまた意味深な表情で微笑んだ。
意味が判らない直美は目をパチパチしながら怪訝そうに二人を見つめていた。

パーティー前

１２月２５日も夕方を向かえ、風景の色も変わろうとしていた。今日ばかりは、街灯はもちろん家の外壁や街路樹などにも飾られた色とりどりの光が眩く輝いて、何かと暗い話題の多かったこの国を元気付けているようにも見えた。

「ちょっと、その皿はそっちじゃないよ。ほら、これ先に持っていって。もう、ここらへんにある本、邪魔よ。子供たちが来る前に片付けておいてよ。」

芝井はその日、朝から姉の里美に小言を言われっぱなしだった。この事務所の主のはずなのに…、と納得がいかない表情になるが、渋々指図に従う。

「新田さんは来れるの？」

せかせかと動きながら、姉が聞いてくる。

「ああ、少し遅れるかもしれないけど来るって言ってた。一応言っておくけど、新田には何にも話してないから子供たちに勘繰られるようなことは言わないでくれよ。そもそもあいつに演技なんか期待できないし、仕掛けもすぐに見破られることはないだろう。直美はまだ疑ってるみたいだから、新田が本気で不思議そうな顔をしてくれた方が、現実味があるっていうもんだ。」

「新田さんじゃなければ、誰が協力してくれるの？」

「まあ、誰でもいいじゃないか。ほら、早く準備しないと子供たちが来てしまう。」

今度は逆に里美を急かして準備させた。

「ここが、直美の叔父さんの探偵事務所なの？」

優子が直美の案内の後を追って入ろうとしているビルを見上げて言った。辺りはすでに暗くなり、優子が見上げたビルも1階と3階だけに明かりが点いていた。
「そう。ここの3階が有の事務所なんだ。」
5階建てビルの3階が今日の会場だ。1階には食堂のようなお店があって、2階にもこの間まで料理店が入っていたのだが、いつの間にか無くなって、今はカラッポだ。4階、5階は行ったことがないので解からない。今度行ってみようかな、などと考えていると、
「探偵って何をするお仕事なの？」
若菜が尋ねてきた。本好きの若菜も現実の探偵に会うことは初めてだから興味があるのだろう。
「う～ん、困っている人の相談に乗ってあげる仕事、じゃないかな。たぶん：。」
正直なところ、直美も詳しいことは解からなかった。ただ、刑事である新田さんと事件の話をしているのは度々見かけているし、その刑事が芝井に頼み込む姿も見ているので良い事をしているんだとは思うんだけど：、程度の知識しかない。
「ごめんね、変なこと聞いちゃって。」
若菜が、立ち止まって腕組をして考え込んでいる直美を見て、申し訳無さそうに謝った。
直美は、ハッと顔を上げ「えっ、ううん、別にいいの。」と言って思い出したかのように歩き出した。
階段を上がって短い廊下の先にあるドアで止まってノックし、「入るよ～」と声を出して中に入った。が、部屋の中は真っ暗で何も見えない。さっき事務所を眺めたときには、明かりが点いていたはずだ。ということは：。

パーティー

「メリークリスマス！！」
突然、大声とともにクラッカーがパンパンッと大きな音を立て、その数秒後明かりが点いた。直美は、普段から何を考えているのかわからない叔父の人物像をある程度把握していたので、明かりが点いていなかった時点で『何か怪しい』と思って心の準備が出来ていたが、そんな予備知識の無かった二人は目を大きくして硬直していた。
「メリークリスマス。さあ三人とも、これ付けて。」
今度は里美が有無も言わさず、優子と若菜に何かを被せた。それはトナカイの角がついたフードだった。よく見ると、母や叔父もサンタの帽子を被っている。こんな物まで用意していたとは：。
「あらあ、可愛いトナカイさんだこと。さあ、直美はこれ付けて。」
と無理やり付けられたのは：。
「ちょ、ちょっと～。何で私だけ赤い鼻なのよ！」
「いいじゃない。あははは、似合ってるわよ『赤鼻のトナカイ』さん。」
ピエロのような赤鼻を付けられた直美は、みんなに笑われ怒っていたが、いくら本気で怒っていても赤鼻姿が滑稽すぎて、何を言っても笑い話のように聞こえてさらに笑われた。
「ほらほら、今日はクリスマスなんだから楽しくいこうぜ。」
芝井が、頬を膨らませている直美の肩をポンポンと叩いて微笑んだ。
「ようし、まず俺のマジックから披露しようか。」
勢いよく立ち上がった芝井は、「チャララララ～ン」と手品をする時には必ずかかるＢＧＭを口ずさみ１０円玉を取り出した。横にいた若菜は口をポカンと開けながら直美に耳打ちする。
「直美の叔父さんて、いつも『こんな』なの？」

直美は、いつもはもっとクールなはずなんだけど‥、とは言えず黙ったまま苦笑いした。

楽しい時は時間の流れが速く感じる。
芝井のグダグダのマジックショーから始まって、ボードゲームやビンゴゲーム、トランプなどをして楽しみ、その間優子も若菜も――もちろん私も母も――笑いっぱなしだった。 特にトランプで負けた若菜が、罰ゲームでしたモノマネが爆笑をかっさらった。
「な、な、な、何だバカヤロー」
と茹でダコのように顔を真っ赤にして、口ごもりながら小さな声でＴＶタレントのモノマネをしたのだが、全く似てなくて、またそこが面白くみんなで大笑いしてしまった。普段は物静かで口数の少ない若菜の違う一面が見れたような気がして、大笑いしながらも少し嬉しかった。

午後7時を回ったところでインターホンが鳴った。
「新田が来たんだろう。直美、ちょっと行って来てくれ。」
芝井の言うことに従い玄関のドアを開けると、案の定新田が手土産を持参して立っていた。
「メリークリスマス、直美ちゃん。あれっ、赤鼻なんて付けちゃって、ノリノリだな。」
またもや茶化された直美であったが、楽しく過ごせていたのは事実だったので、文句も言わずニコニコしながら新田を中へ案内した。
「大きな笑い声が外まで漏れてるぞ。」
「今日だけのことなんだから、大丈夫だろ。ほら、新田もゲームに

参加しろよ、この若菜ちゃんて子が面白いんだ。」
紹介された若菜は、モノマネのことを思い出したのか、また茹でダコになり、それを見たみんなも再び大笑いした。新田が入ったことで、子供たちは再度遊びに夢中になり楽しんでいた。
芝井も輪の中に加わって楽しんでいたが、壁にかかっている時計の針を確認すると、
「姉さん、そろそろクリスマスケーキを食べようじゃないか。」
と言った。わー、と歓声を上げる子供の声を聞き、里美も「そうね。」と行ってキッチンへ向かった。
時刻はもうすぐ午後8時を迎えようとしていた。

サンタが来た！？

ケーキが机の上に置かれると、ケーキ上に刺してあるロウソクに火を付け、部屋の明かりも消した。
「やっぱり、この方が気分が出て良いな。」
確かに、仄かなロウソクの灯りに揺らめいて見え隠れする顔や雰囲気は、何か幻想の世界へやってきたような気持ちさえする。しばらくしてから、
「よし、じゃあ子供たち三人で火を吹き消してくれるか。」
叔父の言葉で、三人はケーキに近づいて大きく息を吸った。
「いっせーのーでっ！」
ふーっと三方向から吹かれた風によってロウソクの炎は消され、空想の幻想が一瞬にして暗闇の世界になってしまった。
「姉さん、明かりをつけてくれ。」
暗くて顔は見えないが、叔父の声がした。「はい」という母の返事を聞いた後、強烈な光が差し込んできた。明らかに部屋の明かりではない、その証拠に窓側だけが明るかったのだから。子供たちは反射的に窓の方を見た。
そこに映っていたのは、あのシルエットは…。

「サンタクロース！！！」
三人揃って声を上げた瞬間、差し込んできた光が消え、今度は部屋の明かりが点いた。窓の外を見ても、普段見ている街の風景しか写ってなかった。
訳がわからない、という感じで固まっている優子と若菜を放っておいて、さっきまで光が差し込んでいた窓まで走るような足取りで

行き、勢いよく窓を全開にし首を伸ばしてキョロキョロと見渡した。が、何も無かった。突き刺してくるような冷たい風が部屋を通り抜け、みんながブルブルと震える仕草をするので、今度は外から確認しようと玄関まで走った。靴を履きドアノブを回して飛び出そうとしたが、すぐに唖然とした表情で戻ってきた。

「どうしたの、直美ちゃん？」

優子が話している声が届いているかどうかも解からないぐらい驚いた表情をしている直美が、

「これが、玄関先に置いてあったの…」

と言って、手に持っていた物を机の上に置いた。それは、

『メリークリスマス　　直美ちゃん　優子ちゃん　若菜ちゃん

聖なる夜を楽しんでください

サンタクロース

より』

という、クリスマスカードだった。

もみの木の絵で綺麗に縁取られ、中央に鈴まで描かれているそのカードは即興で出来るものではないことぐらいすぐに判る品だ。

しかも、私たちがここへ来る際に廊下を通ったときには、カードどころか何にも置いてはいなかった。さらに言うと、新田さんが来たときに玄関を開けて確認したときにも何も置いてはいなかった。

ということは本当に…。

三人はお互いに目を合わせたまま、時が止まったように動くことが出来なかった。

余韻

「来てくれたんだね、サンタさん。」
優子は興奮冷めやらぬ、といった感じで声を震わす。若菜はどう表現したらいいのか解からない、という様子で黙ったままだ。
「確かに、一瞬しか見えなかったけどサンタさんのようだった‥。けど、全体的に黒っぽくなかった？サンタさんの服の色は、赤と白だよね？」
直美は疑問を口にする。混乱している様子は窺えるが、まだ信じられないのだろう。
「服を忘れてきちゃったんじゃないか？サンタも忙しいから。黒服しか無かったんだよ。」
新田が適当なことを言い出した。新田は一連の出来事に関して知りはしないが、俺が事を仕掛けたということも、俺がどうしたいのかも察知してくれたんだろう。何とか子供たちに信じてもらおうと話しを続けようとしたとき、
「本当にいたのね、ブラックサンタクロース‥。」
と里美が呟いた。全員が反射的に、里美の方を振り向いた。
「私、聞いたことがあるの。サンタクロースは、一般的に赤と白の服って決まりのように思っているけど、実際はそうではなくて、様々な色の服を着たサンタクロースがいるんだって。ほら、前に世界の子供たちは文化や慣習や言語が違うからサンタクロースは一人じゃない、って有も言ってたでしょ？それに基づいて、服の色も変えているらしいわ。そして‥」
子供たちは何やら説得力のありそうな話しが出てきたので真剣な眼差しで聞いていたが、俺と新田は目を大きくして驚いた。もちろん姉の話しはデタラメだ。以前、俺が言った話し自体が架空の話であるから、それに基づいた話が真実なはずが無い。
しかし、姉はこういう馬鹿げた話をする性格の人ではないという

ことは、弟である俺は知っている。真面目な彼女がここまで必死になるのは、やはり子供たちを想ってのことなのだ、夢を持って生きて欲しいと‥。

新田に目配せをした。姉に協力してくれ、との合図。新田は頷いて、話の輪の中に加わっていった。それを見届けると目を閉じて今までの出来事を思い返していた。

仕掛けの準備は一週間前から始まった。

俺は懇意にしている喫茶店“ふみ”を訪れ、マスターと話をした。

「マスター、お願いを聞いてくれませんか？」

マスターは少し驚いた顔をしたが、話を聞くにつれて乗り気になってくれた。サンタクロースの形に切り取った絵を１２月２５日の午後８時、事務所の明かりが消えた時に照明ライトにかざして欲しい、と。要は影絵の原理だ。黒い絵になるのは仕方ないが、一瞬パッと見せるだけだし外は暗いので如何様にも誤魔化せるだろうと考えたのだ。

するとマスターは「今日びの子供はそれじゃ騙せませんよ。」と言い、かたどったサンタクロースに色セロハンを貼ったり、立体感を出したり様々な工夫をしてくれた。こうして作られたマスター渾身のサンタクロースは入念なリハーサルを経て、クリスマスの夜、子供たちの前に堂々のデビューを果たしたのだ。

そして、クリスマス当日にもう一つのトリックであるクリスマスカードの仕掛けの準備をした。これは玄関ドアの上の壁にクリスマスカードを置き、ピンで固定する。壁の色とクリスマスカードの色は同じ色にしているので、同化して気付かれることはないだろう。その際、押しピンにピアノ線を巻きつけ、それを天井伝いに這わせて事務所内に引き込んでおく。そうしておいて、新田が来た後、姉が料理の準備や食べた物の後片付けをしているついでにピアノ線を

引っ張れば、押しピンは外れてクリスマスカードは地面に落ちる、というものだ。俺や新田がウロチョロすれば子供たちに怪しまれるが、姉は用意や後片付けをしているので、せかせかしてても怪しまれることは無い。
『新田が来た後』にクリスマスカードを落とす、というところもミソだ。俺は新田を出迎えに行くのを、直美に頼んでいる。直美を一旦玄関外に出すことで、『新田が来たときには、まだクリスマスカードは置かれていない』という事実を確認させるためだ。これとサンタクロースの仕掛けを合わせると、より一層信憑性は高くなる。
まあ、どちらも子供騙しのトリックだが子供相手なので良しとしよう。とにかく上手くいきそうでなによりだ‥。

目を開けると、議論は収束に向かっているようだが会話は続いていた。俺は両手をパンパンと叩いて、
「よし、議論はこれくらいにして、ケーキを食べようぜ。俺、これ、もらうよ。」
と言い、ケーキを取った。
「あ〜っ！それは私のに決まってんでしょ！」
直美が芝井のところに駆け寄り、サッとケーキを奪う。すると、芝井は直美のわき腹をコチョコチョっとこそばし、隙をみてまたケーキを取り返した。
「あはははは！って何するのよ、この変態！」
と、直美の蹴りが芝井のみぞおちに炸裂する。芝井は「うっ‥」とうめき声をあげて動かなくなってしまった。
「ふん、私に勝とうなんて１００年早いわよ。」
再度ケーキを取り上げた直美は、美味しそうにケーキを頬張りながら勝ち名乗りを上げた。
それを唖然とした表情で眺めていた若菜は、

「二人って、いつも『こんな』なの？」
と里美に尋ねた。
里美は、いつもはもっとおとなしいはずなんだけど‥、とは言えず苦笑いしていた。

エピローグ

「今日は楽しかった、黒服のサンタさんも見れたし。月曜日早速みんなに話さなくちゃね：あっと、家に着いちゃった。直美、若菜、また学校でね。おばさん、今日は有難うございました。」

優子はニコッと笑って挨拶し、家の中に入っていった。家に入るまで見送っていた三人は、次に若菜の家に向かった。しばらくの間子供二人で会話しながら歩いていたら、

「直美ちゃん、もう近所だからここで良いよ。寒いのに送ってくれてありがとうございます、おばさん。またね、直美ちゃん。」

と若菜が言って、手を振って走り去って行った。若菜の姿が見えなくなるまで見送っていたが、角を曲がって見えなくなった。

「帰ろうか。」

と直美に声をかけ、家路についた。

「サンタさんは本当にいるんだ。ねえ、直美？」

歩きながら、娘に話しかける。直美は腕組みしながら考え込んでいる。

「う～ん、いないことはないと思わないことはないと思う。」

「なにその返事。」

プッと吹き出して笑いながらも、直美らしい答えだな、と思った。要するに『信じたくはないけど、もしかしたら存在するのかもしれない』と言いたいのだろう。

毎日働いて構ってあげられない日々が続き、家事はもちろん何かにつけて手助けしてくれる直美は、年を追うごとにしっかり者になってきたな、と思う。しかし、しっかりするが故に厳しい現実を直視しすぎて『夢を持てない子』になってしまうのが怖かった。

娘は、直美は、まだ現実を直視するには早すぎる。どうか、どうか夢を持てる子になって欲しい：。

「どうしたの、お母さん？」

いつの間にか涙ぐんでいた里美は、びっくりした表情の直美を見て、
「ううん、なんでもないの。」
空を見上げ、スッと手を差し伸べ久しぶりに娘と手をつないで帰った。

寝息を立てて眠った直美を確認した後、部屋に戻り、熱いお茶を啜って一息ついた。そして、『あの時』のことを思い出していた。直美と弟がケーキを取り合いしていたときのことを。
二人がドタバタと動き回っているうちに、ダークグレーのスーツを着ていた弟の服が徐々に真っ黒になっていった。それが私には『黒服のサンタクロース』に見えたのだ。その『黒服のサンタクロース』は、私たちに大きなプレゼントをくれた。私と子供たちに、楽しい時間を、笑顔を、夢を‥。
「ありがとう、黒服のサンタクロースさん。」
微笑みながらそう呟いた。

――了――

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3051p/

黒い服を着たサンタクロース

2010年12月10日21時22分発行